



喫茶ラビカ公民館祭りビュー!

2月28日、29日の「公民館祭り」は、30周年ということで、大変な賑わいでした。今年も、「喫茶ラビカ」にも昼食のご注文をいただき、230食のサンドイッチと130食のラビカカレーを作りました。

主要メンバーの3分の1が市民創作ミュージカル札幌公演に出かけてしまったので、急ぎよそれぞれが知り合いの方たちにボランティアのお願いをしました。

なにせ、素人集団ですし、こんなに大量のサンドイッチやカレーを作るなんて大緊張。当日は朝8時から作業を始めましたが、米森商店のプロの技を伝授していただいたのと、たくさんのボランティアさんのおかげで、なんと2時間半ほどで出来上がりました。

味の評判も上々で、売り上げもバッチリ! 2ヵ月半続く赤字をちょっと減らすことができました。作業中はボランティアのみなさん、母子会のみなさんとも和気あいあいと交流し、学生時代の調理実習のようだととても楽しんでいただきました。まったく一石三鳥ぐらいの大成功でした。ありがとうございました。

【取材・文:S 藤T子】



公民館同好会 第2弾 「墨友会」 赤平書道同好会

<墨友会>

「ここは流れを止めないで・・・」「この下をきちんと揃えて・・・」ドアを開けると押見先生の写経添削指導が始まっていた。

「ここで少し空間をとって・・・」先生の筆がなめらかに走り清書に朱書きされていく。その動きを見逃すまいとする和田さんの真剣な眼差し。ピンと張り詰める緊張感。いつの間にか、私も息を詰めて見ている。

「先生、この度は受賞おめでとうございます」と声を掛けると「いやー長くやっているからネ」と謙遜されるが、押見黄雲先生は先ごろ、北海道書道協会主催の第35回記念全道書道展で「準大賞」を受賞された。2回目の受賞で同協会の審査会員に。書暦40年、道展会友。

会は、平成3年1月の公民館講座の終了後、赤平書道同好会として発足した。平成10年、先生が体調を崩された一時期中断したが、平成14年4月から墨友会として再開し、現在に至っている。

会長の和田啓子（美雲）さんは当時子供連れで、また最高齢の木村千代さん（71歳）は「のし袋に上手に書きたいから」と60歳からペン習字を習い始めて書に・・・共に書暦十数年のベテラン。

書をすることで「心が落ち着ける時間がとてもいい」と話すお二人。「除雪してからでは手が震えるから時間を決めて書いている」と笑顔の和田さん。その言葉から書が生活にしみこんでいることがうかがえる。

いまスローライフの考えが話題となっているが、まさに書はこれにピッタリ。何かとあわただしい現代には、静かに物事を見つめなおす「心のゆとり」が必要なのかも知れない。

墨友会の活動は月刊誌「書の研究」をお手本として、書道、かな書道、写経、実用書道などを幅広く教書。毎週水曜日 18:30～20:30 まで開催。会費月1,500円、入会申込みは公民館まで。



【取材・文:N 口 Y 光】